

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	Zulfikar Rachman
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) インドネシア文化における依頼表現に関する研究 — TolongとMohonを中心に —			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	高永 茂	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	永田 良太	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	助教	劉 金鵬	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	Titik Pudjiastuti (インドネシア大学)	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、インドネシア文化における依頼表現で使用される補助動詞 <i>tolong</i> (助ける) と <i>mohon</i> (願う) を中心として、歴史言語学、語用論、文献学、言語地理学、社会言語学といったさまざまな観点から分析と考察を行い、その全体像の解明を目指したものである。</p> <p>本論文は全7章からなる。</p> <p>第1章では、研究の背景、インドネシア語の依頼表現における補助動詞 <i>tolong</i> (助ける) と <i>mohon</i> (願う) の用法、先行研究、問題提起、研究方法、研究の意義と論文の構成について述べる。</p> <p>第2章では、<i>hikayat</i> (物語) と <i>babad</i> (年代記) について文献学的な特徴を述べる。本論文で扱う古写本や手紙の特徴と内容ならびに言語的な諸特徴を説明する。</p> <p>第3章では、<i>hikayat</i> や <i>babad</i> といった古写本 (1600年代~1800年代) から依頼表現の事例を抽出して分析する。クラシックマレー語とジャワ語における依頼表現の年代別の使用状況を明らかにする。さらに、話者と相手の社会的立場の違いが依頼表現の使用に与える影響、依頼表現の前後に現れる語句と依頼の負担度の関係について分析する。</p> <p>第4章では、マレー語の依頼表現を中心に <i>mohon</i>, <i>minta tolong</i> (助けを求める) / <i>tolong</i> にどのような文化が反映されているかを考察する。ヒンズー教・仏教時代からイスラム教が普及するまでの社会的状況と文化を説明し、依頼表現の表現形式との関連を分析していく。各古写本の内容に反映されている文化的記述に注目し、マレーの四行詩 (<i>pantun</i>) における <i>tolong</i> と <i>mohon</i> の使用場面、聖典コーランにおける <i>tolong</i> と <i>mohon</i> に相当する言葉を使用する場面を収集し、<i>mohon</i> と <i>tolong</i> がどのように使用されているかを解明する。</p> <p>第5章では、インドネシアの地方言語における <i>minta tolong</i> / <i>tolong</i> と <i>mohon</i> の分布状況を考察する。また古写本に出現した <i>pohon</i> (願う・木) がどの地方言語に存在するか、地方言語において <i>minta tolong</i> / <i>tolong</i> と <i>mohon</i> が依頼表現として働くか否かを解明する。スパイス貿易とジャワ帝国の政治経済的な活動によって、どのように各地方言語がマレー語やジャワ語の影響を受けたのかについても検討する。</p> <p>第6章では、インドネシア語における <i>minta tolong</i> / <i>tolong</i> と <i>mohon</i> の使用実態を明らかにする。SNS</p>			

(WhatsApp, LINE, Messenger, Twitter) とメールでのやりとりを調査対象とする。インドネシア語の依頼表現が上下関係と親疎関係によってどのように変化するかについて考察する。また, minta tolong/ tolong と mohon の共通点と相違点を究明するために実施したアンケート調査の結果を分析する。

終章では, インドネシア語における依頼表現のminta tolong/ tolongとmohonの歴史的変遷を考察する。クラシックマレー語とインドネシア語における依頼表現を比較して用法の変遷を考察する。依頼表現の形式と用法という二項目に分けて変化の過程を明らかにする。さらに, 本研究の限界と今後の課題について述べる。

本論文は, 次の三点で高く評価できる。

(1) 古写本を用いて通時的な研究を行った点。本論文で対象とした古写本はマレー語とジャワ語で書かれており, 読解が難しい史資料である。主に四種類の史資料から丹念に用例を収集し, tolong と mohon の通時的変化の過程を解明している。

(2) インドネシア全土から主要な地方言語を選び郵送法を用いて調査し, tolong と mohon の言語地図を初めて作成した点。この言語地図を詳細に分析して語の伝播過程を明らかにしている。

(3) インドネシア語における**tolong**と**mohon**の用法を社会言語学的方法を用いて調査し, 現代インドネシア社会における使用実態を明らかにした点。

史資料の選定方法と用語の概念規定に若干課題を残すものの, インドネシア文化の依頼表現について通時的ならびに共時的観点から分析と考察を行った労作と言える。

以上, 審査の結果, 本論文の著者は博士 (文学) の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和6年2月7日

備考 要旨は, A4版2枚 (1,500字程度) 以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed A4 size, 2pages (about 500 words).)